エリュシオンの宴
-恥辱のプロレスリング-
ノヴェール

目次

キャラ紹介 ・・・ 3

序章
勝利の栄光～Angel Smile～ ・・・ 8

第一章
冥界の蠢き～Conspiracy～ ・・・ 13

第二章
エリュシオンの罠～Opening～ ・・・ 20

第三章
解き放たれた魔獣～Show Time～ ・・・ 34

第四章
絶望の戦姫～Tragedy～ ・・・ 48

第五章
公開処刑～Lynch Law～ ・・・ 63

第六章
祭りの後～Closing Party～ ・・・ 88

第七章
黄泉の結実（表）～Lovers-Side:D～ ・・・ 101

第八章
黄泉の結実（裏）～Lovers-Side:S～ ・・・ 125

終章
堕天～Fall Down～ ・・・ 144

転章
再誕～Rebirth～ ・・・ 165

キャラ紹介

リングネーム：レディ恵理
本名：宮城 恵理佳（みやぎ えりか）
コンビ名：キューティー・ペア
所属：レッスル・ドミニオン

Age：23
Height：165cm
Bust：F

Status
・Power：A'
・Stamina：A'
・Speed：A'
・Technique：A'
・Mental：A'

国内トップクラスの女子プロレスラーで、その人気は押しも押されもせぬナンバーワン！
レディの名に相応しく、その立ち居振る舞いは優雅にして優美。
フィジカル・スピード・テクニック、全てにおいて高いレベルの持ち主で、器用貧乏という言葉とは縁遠い、非の打ちどころのないパーフェクトファイター。
人格者としても知られており、彼女を嫌うような話は一切聞かない。
パートナーの陽菜を本当の妹のように可愛がっており、やや甘やかし気味だが良き先輩である。
その気品から、実家は長く続く名高い資産家で、休日はクラシックを聴きながら西洋文学書を片手にカモミールティーを嗜むのが常……などと勝手に想像されたりしている。
実際の実家は、福島の石材店を家族経営している庶民である。

リングネーム：エンジェル陽菜
本名：九条 陽菜子（くじょう ひなこ）
コンビ名：キューティー・ペア
所属：レッスル・ドミニオン

Age：15
Height：156cm
Bust：E

Status
・Power：C
・Stamina：B
・Speed：S'
・Technique：B
・Mental：C

女子プロレスデビュー1 年足らずで、トップクラス女子プロレスラーの仲間入りを果たした天才少女。
小柄であることも活かした速度は、他の追随を許さないスピードファイター。
しかし、若いが故の経験不足は否めず、想定外の展開には戸惑いがち。
良くも悪くも調子に乗りやすく、攻めに回れば怒涛の攻勢をかけるが、一旦受けに転じると劣勢を跳ね返せなくなることも多い。
プロレスラーでない時は、私立聖自由ヶ丘学園中等部に通う三年生。
その可愛らしい見た目と愛嬌から、アイドルレスラーとしての人気はナンバーワンで、世のお兄様方を悶えさせている。
メディアへの露出も多く、グラビアを飾ったりオリジナル楽曲まで出す始末である。学校でも、自他ともに認める人気者。
パートナーの恵理を心から尊敬しており、彼女の前では素直で従順。一方、本来の性格は目立ちたがり屋の負けず嫌いである。
思春期の少女らしく想像力が豊か…と言えば聞こえはいいが、時折妄想が暴走して脳内世界に突入することもしばしば。
父親は実業団・夕陽化成に所属しており、現役時代には短距離走でオリンピック選手にもなった実力者。母親はレスリングのメダリストで現在はフリーのコーチという、生粋のアスリートエリートである。

リングネーム：サタン魅鬼

本名：祁答院 美姫（けとういん みき）

コンビ名：ヘル・レイザーズ

所属：モンスター・ハデス

Age：25

Height：169cm

Bust：G

Status

・Power：S'

・Stamina：S'

・Speed：D

・Technique：C

・Mental：S’

国内トップのヒール女子プロレスラー。
そのパワーは超人的であり、強靭な肉体はどんな技にも屈しない。
スピードや小手先の技など不要という純粋なるパワーファイターで、サシで戦えば国内最強の女子プロレスラーと評する者もいる。
プレースタイルは極めて凶悪で、相手をいかに苦しめるかを無上の喜びに感じる冷酷非情なるサディスト。
しかしリングから降りると毒気を抜かれたように、気怠い雰囲気のお茶目な女性と化す。
周囲からは二重人格者とも囁かれるが、本人としては実感が薄く、あくまでオンとオフの落差が大きいだけで本質は同じとのこと。ちなみに貞操観念は低い。
ちゃらんぽらんで無責任なように見えるが、意外と状況をよく見ており面倒見も良い人物。
プライベートはシークレットだが、傍若無人かつ問答無用な女王様ぶりから、ファンの間ではよからぬ噂が飛び交っており。やれ父親が反社の組長だの、チャイニーズマフィアの末裔だの、有力閣僚の隠し子だの。言いたい放題である。
実際は、父親は大手企業・K2 製薬株式会社の代表取締役で、母親はホストクラブ・ラブホテル・キャバクラ・SM クラブを経営するやり手オーナーという、それはそれでエキセントリックな家庭環境である。

リングネーム：デビル魔依
本名：大之木 舞（おおのぎ まい）
コンビ名：ヘル・レイザーズ
所属：モンスター・ハデス

Age：20
Height：159cm
Bust：C

Status
・Power：B
・Stamina：B
・Speed：A
・Technique：S'
・Mental：B

凶悪なダーティーファイトで知られるヒール女子プロレスラー。
全身凶器とも言われる凶器攻撃に定評があり、隠し武器も数多い。
実は純粋なプロレスラーとしての実力も高く、身軽な動きと数多の技を使いこなすテクニカルファイター。
パートナーの魅鬼にとっては妹分に当たる立場だが、そのやり取りは対等な親友のような雰囲気で、コンビ仲は非常に良い。
魅鬼ほどの落差はないが、ヒールのプロに徹するリングから降りれば年相応の女子の面を覗かせたりもする。
周囲が巨乳ばかりであるため、自身の胸にはやや劣等感あり。
考えるよりも先に口や手が出るという、理性より本能タイプのちょっぴりおバカさん。
実家は岡山県。父親は総社市役所に勤める公務員、母親は保育士という一般的かつ家庭的な家族だったりする。

保部 凛太朗（やすべ りんたろう）
所属：国立成都体育大学 保健医療学部 プロレス同好会
Age：19
Height：175cm

都内の大学に通う一年生。
ぱっと見は草食系の優男だが、脱いだら意外と筋肉質。
学業の成績は優秀。
傍目の印象とは違いプロレスに熱中しており、特に女子プロレス観戦に足しげく通っている。その胸中は…

実況
本名：新館 次郎（あらだて じろう）
所属：フリー
Age：43
Height：168cm

若手の局アナ時代に押し付けられた女子プロレスの仕事で感銘を受け、後に女子プロレスの実況をするためにフリーになった男。
特にトラブルの多いヘル・レイザーズの試合を好んで引き受ける。
本人は試合を盛り上げたいという一心だが、頻繁に暴走しては観客を置いてきぼりにして白い目で見られたり、余計なことを言っては火に油を注ぐ「荒立て次郎」と陰口をたたかれることも…

序章
勝利の栄光～Angel Smile～

歓声が響き渡るスタジアム。
今宵のそこは女子プロレスの試合会場であった。
女子プロレス……それは、看板としては鍛えられた女性グラップラー同士がぶつかり合う格闘技のようであり、正義対悪という劇場要素を擁するショービジネスでもある。
すなわち、バトルとショーをミックスさせた熱く華のあるドラマティックなエンターテイメントなのだ。
国内における女子プロレスの起源は、お色気要素の強い見世物的なキャットファイトであったが、時代とともに進化を続け、今では男子の行うプロレスにも引けを取らない一大興行になっていた。
1970 年代後半〜90 年代初頭にかけては一大ブームを巻き起こしたが、現代においては様々な事情でかつての時代より低迷しているのが実情であろう。
深夜であっても地上波で試合が放送されることは珍しく、せいぜい往年の名レスラーがバラエティー番組に顔を出すくらい…という扱いである。
しかし、女子プロレス自体はまだまだ現在進行形で活気づいており、プロレスよりも女子プロレスが好きというコアなファンは数多く存在しているのだ。
とにかく、その女子プロレスに魅入られた大勢の人々が、試合展開に一喜一憂し、応援に熱が入り、時にはブーイングも響くのである。
そんな観客の中に、静かに中央のリングを見つめる青年がいた。彼の名前は保部凛太朗。物静かではあるが、試合を見つめる眼鏡の奥の瞳は熱く、その両拳は強く握りしめられていた。
それもそのはず、今日の試合は大人気のカードであった。
先月、長年に亘って女子プロレスの王者コンビとして君臨していたクイーン・ゴッデスが引退したのである。
リーダーであるヘラ中松は高齢であることに加えて、試合中の負傷が痛手となった。その際、パートナーの天上聖子も第二子の妊娠が発覚したことで同時に引退を表明するに至り、結果的に王座は空位となったのである。
センセーショナルな王者引退であったこともあり、次期王座決定戦を大々的に宣伝することで、女子プロレス界は下火となっている人気を盛り返すことを狙ったのだ。コロナ禍が明けて入場規制が解除されたことも好機であった。
そこでトップ 1・2 である団体を選抜し、各団体の代表コンビをぶつけるイベントを企画する。

人気ナンバーワン団体であるレッスル・ドミニオンからは、ベビーフェイス（善玉）コンビが。荒くれ者が集う男女混合団体であるモンスター・ハデスからは、高い実力を持つヒール（悪役）コンビが代表に選ばれた。
業界の狙いは当たり、会場は満員御礼で立ち見まで出る始末である。
片や、アイドル的人気を誇る、正統派女子レスラーコンビ・通称キューティ・ペア。
対するは、最強のヒールレスラーコンビとの呼び声も高い、ヘル・レイザーズ。
対照的な善と悪のタッグが激しくぶつかり合う。

『キューティー・ペアの天才児・陽菜選手っ。まさに蝶のように舞い、蜂のように刺しますっ！！』
実況が盛り上げる中、リング上では若手 No.1 レスラーと言われるキューティ・ペアのエンジェル陽菜が、得意のスピードで対戦相手を翻弄していた。
「くそっ！ちょこまか動いてんじゃねえよっ。」
なんとか陽菜を掴もうとするのは、ヘル・レイザーズのリーダーであるサタン魅鬼である。パワー自慢の彼女だが、小柄でスピードファイターの陽菜を捉えきれないでいた。
「いいぞぉ〜〜〜！！陽菜ちゃぁ〜〜〜〜ん！！！！」
「かわい〜〜ぃ！！」
観客席からも、若い男性を中心にした声援が飛ぶ。
「応援ありがとう！みんな〜〜♪」
その声援に応えるように手を振った陽菜は、魅鬼への反撃に転じると、目にも止まらぬ攻撃を繰り出す。
『出たぁ〜〜〜っ！陽菜選手の十八番・エンジェルジャベリン！！』
エンジェルジャベリン…言ってしまえば高速の連続地獄突きなのだが、彼女の華麗なその技はリングネームに相応しい名前で呼ばれていた。
「ロートルは、もう身体が重いんじゃな〜い？」
「くっ！…なんだと、ガキがぁ！！」
陽菜の挑発に、魅鬼が反撃の狼煙を上げる。
「魔依！やってやるぞ！！」
「はいよ〜。」
コーナーに立っていた魅鬼のパートナー・デビル魔依が身軽なアクションでコ

ーナーポストに上り、即座に陽菜に向かってダイブした。
「…キャァ！！」
不意を打たれた陽菜に、魔依のボディプレスが炸裂する。
「カハッ！…ごほっ、ごほっ…！」
陽菜の呼吸が一瞬止まり、喉を抑えて咳込む。しかし、休む暇も与えず、魔依がスリーパーホールドを極める。
「…ぁっ…あぁ……っ！！」
「さっきは、よくもやってくれたねぇ。」
動きを封じられた陽菜に、指をポキポキ鳴らしながら魅鬼が迫る…が、
「！！？…魅鬼！後ろだ！！」
「あぁん？」
魔依の声に反応し、魅鬼が振り向くと、その首にラリアットが炸裂する。
技を繰り出したのは、陽菜のパートナーであり、キューティー・ペアのリーダー・レディ恵理だ。
ラリアットで弾き飛ばされた魅鬼の身体が魔依に衝突し、その隙に陽菜が拘束から逃れる。
すぐさまローリングソバットを魔依に食らわせて、距離を取る陽菜。
鼻血を流しながらも、陽菜との距離を詰めようとする魔依だが、その前に恵理が立ちはだかりチョップを繰り出してくる。
得意の跳躍で躱した魔依が、恵理に食って掛かる。
「タッチもしないで背後からの不意打ちとか、正統派レスラーの名が泣くぜ、レディ〜ッ！」
「先にルールを破ったあなたたちに言われたくないわね。」
肩をすくめながら、挑発を返す恵理。
「あたしらはヒールだから、いいんだよぉ〜〜〜！！」
コスチューム内に隠し持っていたフォークを握り、連続的に突き出す魔依だが、華麗なステップでそれを躱す恵理。しかも両腕を組んだままで、口元には余裕の笑みまで浮かんでいる。
「さすがだぜ、レディ〜〜！！」
「見てよ、あのフットワーク！素敵だわ〜！」
「デビルの攻撃なんか当たるもんかよ！」
「恵理様〜っ、頑張って〜〜！」

さすがは、国内トップの人気を誇るレディ恵理である。老若男女問わず一際大きな声援が響き渡る。
しかし、その声援に顔をしかめているのは凛太朗である。
レフェリーが制止するのも聞かず、魔依が突き出したフォークを恵理が手刀で叩き落し、彼女の手首を掴む。
「！！？」
そのまま魔依を、ブンブンと豪快に振り回していく。
「ぐわぁ〜〜〜っ！」
成す術もない魔依に、客席からブーイングが飛ぶ。
「何やってんだぁ〜〜！デビル！！しっかりしろよなぁ〜！！」
しかもブーイングを飛ばしているのは、ヘル・レイザーズのファンのようである。
その声に、凛太朗は思わず睨みつけてしまう。
「魔依！今いくぞぉーっ。」
駆けつけようとする魅鬼だが、背後の陽菜がロープの反動を利用して、その背にドロップキックをヒットさせる。
「がはっ！！！？」
同時に、魔依の身体を魅鬼に向かって投げつける恵理。
さすがのチームワークと言えるタイミングのコンビネーションであり、勢いよくぶつかった魅鬼と魔依はそのままノックダウンし、勝敗は決した。
『恐るべき悪魔ヘル・レイザーズも、天使の如く可憐なコンビには勝てませんでした！』
『勝者は、麗しのジャスティス、キューティー・ペア〜〜〜〜！！！！』
盛り上がる実況とリングアナが勝利を告げ、鳴り響くゴングと声援の中、恵理と陽菜は互いの手を握り合いながら、その手を天に掲げる。
「恵理さんのおかげで、私たち勝てました！ありがとうございます…」
「陽菜ちゃんもナイスアシストよ。こちらこそありがとう。」
「え…恵理さん…」
陽菜が感涙を浮かべる。
会場の眩しい照明の中、二人の笑顔は誰よりも輝いていた……

第一章
冥界の蠢き～Conspiracy～

……ガァアァァ〜〜〜ンッ！！！！
ヘル・レイザーズの控室で派手な音が響く。
「くっっそぅ〜〜！！」
それは、魔依が自らの拳でロッカーをへこませた音であった。
「魔依ってば、な〜に荒れてんのよ。負けるのはいつものことでしょ。」
怒りの表情を浮かべる魔依とは対照的に、ベンチに腰かけている魅鬼は落ち着いた風である。
「魅鬼は悔しくないの！キューティー・ペアとかいって人気みたいだけど、あんな奴ら私たちが本気になったらさ…」
「ど〜ど〜。…確かに、魔依の思うところも分かるわよ。でもね。あっちはヒロイン、こっちはヒールよ。ヴィランがヒーローに勝って終わる映画とかクレームもんでしょ〜。」
「うぅ〜〜〜。そうなんだけどさ。キャラだけで勝敗決められるってのも、なんか釈然としないよ〜。」
リング上ではワイルドな二人も、こうして見ると普通の女の子……いや、単体で見ればかなり可愛い女性と言えた。
ラフファイトで知られるパワーファイターのサタンも、男性より大柄なわけではないし寧ろグラマラスである。赤く扇情的な髪をポニーテールにしたその小悪魔チックな表情で、笑みを向けられれば大概の男は虜になるだろう。
軽業とダーティーな戦法で知られるデビルも、健康的な肌艶の肉体は女の子らしく華奢な細さであり、顔だちも整っていた。
しかし、いざ試合となると極悪な笑みを浮かべて、残虐な戦い方をしなければならない。それが悪役としての役目である。
悪を演じてこそ正義のヒロインが引き立ち、正義が勝ってこそ観客が盛り上がるのだ。魔依だってプロとして、その辺は理解している。
時にはヒールが勝つこともあるが、その確率は高くないと言えた。プロレスにおいて具体的な台本があるわけではないが、基本的な展開やおおまかな勝敗は、前もって決められているのが現実だ。
自分たちは、当初からヒールを目指したわけではない。ただ、プロレスラーとして活動している内に、ヒールとしてのキャラ付けがされてしまったのだ。今更クリーンファイターには戻れない。とはいえ…
「…納得できない。あいつら人気があるからって調子こいてるよ！」

あいつらとはキューティー・ペアのことである。
陽菜は 10〜30 代の若い男性を中心に人気があり、恵理は誰からも好かれている。
それに比べて、自分たちを応援するのは、ほとんどが暴力に魅入られた野卑な男性であった。
「そうねぇ。特にあの陽菜って奴？まだ 15 歳の中学生だからって、ヤラセ…というか、試合の流れも知らされてないんだってさ。」
「マジで？」
魅鬼の何気ない一言は、魔依には初耳であった。
「じゃあ、あの小娘。自分たちが実力で勝ったと思い込んでるわけじゃん！…なんだよ、それ！最近は、恵理の奴も勝たせてもらってる自覚がね〜よ！」
魔依の怒りが再び増しそうになっている時に、控室のドアがノックされる。
「……チッ、こんな時に誰だよ。」
憮然としながら出入口に向かった魔依は、乱暴にドアを開けた。
「はいっ！誰だいっ。」
「……！！！？」
「…ん〜〜？」
ドアの前に立っていたのは、野暮ったい眼鏡をかけて草食系な顔をした青年・凛太朗であった。
「え、マジで誰？…魅鬼〜、あんたの知り合い？」
と、尋ねるが、魅鬼にも見覚えがないようだ。
「……！」
驚いた表情で固まっている凛太朗を見て、ピンときた魔依は彼を睨みながら詰め寄る。
「あ〜、はいはい。キューティー・ペアのファンね。あの澄ました恵理の美貌にやられたわけだ。」
「…えっ？、ぁ…いえ、そうではなくて…」
「なるほど、陽菜の方ね。君みたいな若い子はああいうロリっ娘が良いわけね。残念ながら、こっちは嫌われ者の控室よ。キューティー・ペアの控室はあ…」
「ちっ、違いますっ！！！」
「「……！？」」
突然、凛太朗が大声を上げたので魔依はおろか、奥にいた魅鬼も軽く驚く。

「ぼ…僕は、や…保部凛太朗と言いますっ。僕は…ヘル・レイザーズの…と、特に、デビル魔依さんの大ファンなんです！！」
「……へ？」
思わず間抜けな返事をする魔依だが、魅鬼は面白そうな展開に、笑みを浮かべ始めていた。
「ちょ、ちょちょ、ちょいちょい！質の悪い冗談はよせよ！君は、どう見てもあっち側のファンだろっ？」
自分たちのようなヒールのファンも一定数いるが、こんなお坊ちゃま然とした男は見たことがない。一言で言えば、タイプが違うのだ。
「じ…冗談なんかじゃありません！僕は、ヒール認定される前から、魔依さんの鍛えられた軽業をはじめとした強さが好きなんです！その、しなやかな肉体美も！」
「ぉ…おぃ…」
魔依が止めようとするのも気付かず、凛太朗の言葉は続く。
「ヒールになっても、勝つため盛り上げるためには何でもありな姿勢が、寧ろ真摯だと思います！…プロレスは魅力的なエンタメだから、ヒールが最終的に負けることが多いのも分かるつもりです！…でも、でもヒールファンの連中ですら、それが分かっていない奴らが多くて…ヘル・レイザーズの…魔依さん達の強さが、魅力が理解してもらえていない気がして、なんだか僕、悔しいんですよっ！！」
凛太朗の熱に圧倒されて、魔依は口をパクパクさせるしかない。それでも、凛太朗は止まらない。
「僕…以前、高校ではいじめられっ子だったんです。昔から、目を付けられやすいみたいで…。でも、魔依さんを見て、僕も強くなりたい。強くならなきゃいけないって！そう思えたんです！だから…、それからは、体を鍛え続けました。」
その言葉に、魔依が凛太朗のシャツの襟口から見える鎖骨あたりに視線を向ける。
（確かに、細身ながら真面目に鍛えているのは本当みたいだな…）
グッと、凛太朗の肩を掴む魔依。
「…っ！？…魔依さん…？」
「うん。やっぱり良い体してるな。まあ、私に言わせりゃ、まだまだだが。」
「あ…、はいっ。もっと、頑張ります！」

「で、鍛えた身体で、勝てたのか？」
「え…？」
「君をいじめていた奴らに、だよ。」
「あ…いえ。ぶっちゃけ多勢に無勢でした。」
「…そっか。」
魔依が凛太朗の肩から手を引く。
「でも。…凶器とか隠し持ったり、後ろから不意打ちしたり、砂で目つぶししたりして、痛い目見せてやりました。」
「……！はっ…マジかよ？やるねぇ〜。」
「ヘル・レイザーズから学んだ戦法です。勿論、反撃でボコボコにされましたけど…それからは、いじめられることはなくなりました。」
凛太朗の強い眼差しを見て、思わず魔依の瞳が潤みそうになる。
「ぁ……で、君は何しにここに来たんだ？凛太朗君。」
「あ…あれ？そ…そういえば、なんでだろう？なんだか、今日の試合をしてたら、モヤモヤしちゃって、え〜っと、気付いたら…ここに。」
しどろもどろになる凛太朗を見て、魔依はおかしくなってしまう。
「ぷっ、あはははははっ！なんだ、そりゃ！あっはっはっはっは〜。」
「ぅう〜〜……」
何も言い返せない凛太朗を見て、魔依は笑うのを止めて真剣な表情になる。
「でも…なんだろうな。…私もだ。」
「え？」
「私も、今日の試合は、モヤモヤした…っ」
魔依が自嘲気味に呟く。そんな魔依を見て、凛太朗が己が拳を握る。
「……魔依さん……。お願いがあります。」
「なんだよ？」
「次の試合……勝ってください！キューティ・ペアに！ヘル・レイザーズの…本当の強さを見せてほしいんです！！」
「「……！！」」
凛太朗の思い切った発言に、ヘル・レイザーズが息をのむ。
そして、魔依の口の端が上がる。
「言うね〜。……いいだろう。勝ってやるよ。何がなんでもな。ただし！私たちの勝ち方はルール無用のヒールだぜ。その残虐ぶりに、勝った後「幻滅したので

ファンをやめます」とか言うなよ？」
「勿論です！見せてください。ヒールの勝ち方を…！」
「ああ、任せとけ。…凛太朗君、君…ヒールの才能あるよ。」
「最高の誉め言葉ですっ。あ、凛太朗でいいですよ。尊敬する魔依さんに、凛太朗君なんて呼ばれると、面映ゆいといいますか…」
「はあ…、呼び方なんてどうだっていいだろう？…次の試合。君の応援、期待してるよ。凜君…♡」
魔依が凛太朗の首に手をまわすと、その頬にキスをした。
「〜〜〜〜〜〜……！！！！」
「じゃあ！！」
真っ赤になった凛太朗を突き放すようにドアを閉めた魔依だが、そんな彼女の顔もトマトのように真っ赤だった。
しばらくして、控室に向き直ると、ニヤニヤした魅鬼と視線が合う。
「あ……っ」
「何？私の存在忘れてた？…まあ、二人きりの世界だったもんね〜〜。」
「ち…違…っ」
慌てる魔依だが、なんとも否定しきれない。
「魔依ってば、ああいう子がタイプなんだぁ。意外…かな。」
「だ…だからぁ〜〜〜……ぅう……、魅鬼…」
「…何？」
「絶対、勝つぞ…！！」
「王子様の応援付きだものね〜。」
「それはもういいっつーの！」
立て続けの展開に、魔依の顔色はずっと赤いままである。
「ふふ、冗談よ。…でも、やるからには徹底的に、ね。」
魅鬼の瞳が真剣になる。
「ああ、あの恵理の澄ました顔を今の私以上に真っ赤になるまで、恥辱で染めてやるぜ！」
「陽菜って子も、リング上でトラウマになるくらい生き恥かかせてあげるわよ。もう、恥ずかしくて中学校に通えなくなるほどにね〜。」
「「フフフ…、は〜はっはっはっはっは〜〜……！！！！」」
正統派レスラーを辱める愉悦を想像しながら、ヘル・レイザーズはヒールらしい

高笑いを響かせるのであった。

第二章
エリュシオンの罠～Opening～

キューティー・ペアが王座についてから約一ヶ月後、その試合の日はやってきた！
『レディース・アンド・ジェントルメ〜ン！！今宵、モンスター・ハデスが主催する企画試合。その名も『エリュシオンの宴』！メインイベントは、現王者のキューティー・ペアにヘル・レイザーズが挑むスペシャルリベンジタッグマッチです！』
満員の観客たちが歓声を上げる中、リングアナの声が響く。
今回のイベントは、ひと月という短い準備期間で開催にこぎつけたとは思えないほど、都内の広大な会場での開催である。とはいえ、それを踏まえても入場チケットは高額で、２階の後列席でも１万円弱が定価となっていた。
今回はキューティー・ペアとの因縁試合ということもあり、多数のネットカメラによる全世界生配信という異例の態勢である。しかも、観客には会場内での撮影まで許可されていた。
実際に参加するのは 8 団体であり、メイン以外の 6 団体も実力は折り紙付きである。そんな団体のトップである彼女らが、本イベントでは前座としてシングルマッチを行っているのだ。
これならば、かなり高額なプラチナ・チケットであっても、完売というのも納得である。
そんな前座というには贅沢な 3 試合が消化され、会場が十分に温まった頃合いで、ついにメインイベントの時間となった。
『さあ、皆様お待ちかね。天から舞い降りた我らがアイドル・キューティー・ペアの入場です！！入場曲は YOASOBI の「アイドル」！！』
リングアナの合図で、鮮やかにライトアップされたゲートに恵理と陽菜が登場する。
『さすがは王者！威風堂々！今宵も、美しいコスチュームがリング上で躍るのでしょうか！』
（(うぉぉぉぉおお〜〜〜〜〜〜っ！！)）
まるで、本物のアイドルが来たような歓声が、観客から上がる。
それは、恵理のコスチュームがアクアブルーとホワイトを基調にしたドレス調で、金と銀の飾りを付けた豪華なものであったからだ。陽菜の方は燃えるようなルビーレッドを基調としており、黒のゴスロリ調装飾が揺れていた。こちらは実用性よりファッション重視なのか、セパレートタイプの造型であった。

いつものようにリングに向かうロードを優雅に進む恵理には、その胸にわずかな懸念があった。
（これほどのイベントであるにもかかわらず、いつもよりも試合の打ち合わせが雑だったのよね。盛り上げるためには丁寧な摺り合わせが必要なはずなんだけど、アドリブ重視な雰囲気がなんだか…）
一歩後ろを歩くパートナーを振り返ると、陽菜は何の心配もなさそうに無邪気な様子だ。
両手を大きく振りながら、会場中のファンに満遍なく笑顔を向けて愛嬌を振りまいている。
そんな彼女の様子を見ていると、慎重になっている自分が大げさな気がしてくる。
（まあ、例えヘル・レイザーズによからぬ企みがあったとしても、私たちなら撥ね退けられるわ。）
恵理は自信に満ち溢れた瞳で前を向くと、微笑を浮かべて悠然とリングへと歩を進めた。
『そんな王者に挑むのは、黄泉の国から舞い戻った邪悪なる復讐者！ヘル・レイザーズの入場です！！入場曲は Ado の「リベリオン」！！』
毒々しいスモークが焚かれ、その中から妖しげな雰囲気の魅鬼と魔依が姿を現す。
すると、リングアナの声をかき消す勢いで、いつも以上に大きな歓声が上がる。
それもそのはず、今日のヘル・レイザーズは、いつもと違う試合用のコスチュームで登場したからだ。 いつものコスチュームはファッション性が低く、動きやすさを重視したシンプルなものであったが、今宵は艶やかな赤と黒を基調にした、よりタイトで洗練されたものに変わっていた。
特に魔依は、いつも以上に布面積が少なく、挑発的な割にしっかりと機能性も重視されている。
『黒地に赤、そして毒蛇の絵があしらわれたコスチューム！ヘル・レイザーズのトレードマークである悪のシンボルです！』
不敵な笑みを浮かべながら、ヘル・レイザーズが入場ゲートからリングへと進んでいく。
魅鬼はその筋肉質の肉体に鎖を巻き付け、魔依は右手に握った木刀を振り回しながら、いかにもヒールといった雰囲気を醸し出す。

魔依が観客席の中段辺りを一瞥すると、笑顔で手を振る凛太朗を見つける。
「魔依さ〜〜ん！頑張って下さぁ〜〜〜い！！」
凛太朗が声援を飛ばすが、それは大勢の観客の歓声にかき消される。
そんな凛太朗に向かって、少しだけ微笑みを浮かべると、左手を軽く振って応える。
「魔依…？誰に手ぇ振ってんのさ？」
魅鬼が訝し気に声をかける。
「ん〜？凛君が応援してくれたからさ〜。ふふ〜ん♪」
上機嫌な魔依は鼻歌を口ずさむ。
「何言ってんのさ、この広い満員の会場で目が合うとかねえだろ。どこの席とかも知らねえくせによ。」
もっともなツッコミを受けて、魔依は初めて気づく。
「ありゃ？確かにそうだな。…なんで私、凛君を見つけられたんだ？」
「え…、お前、マジかよ…？……ハァ、で…その凛君とやらはなんて？」
「え？普通に「頑張って〜」だってさ。」
キョトンとしながら答える魔依に、
「聞こえんのかよ……。愛の絆って、マジすごいのな…」
と、魅鬼は呆れ気味に呟くのであった。

そんな二人の様子も知らず、恵理がリング中央に進み出る。その後ろから、陽菜も続く。
『赤コーナーより、キューティー・ペアの誇るエース！正統派アイドルレスラー！レディ恵理！！そしてパートナーは無垢なるスピード天使！エンジェル陽菜！！』
（(うぉおおおお〜〜っ！！)）
歓声と拍手の中、ヘル・レイザーズのメンバーもリングに上がる。
『青コーナーより、ヘル・レイザーズが誇るラスボス！最凶レスラー！サタン魅鬼！！そしてパートナーはダーティー悪魔！デビル魔依！！』
「魔依さん！！魅鬼さん！頑張って〜！！」
魔依の耳に、客席から凛太朗の声援がかすかに届く。
（凛君、応援してくれてるんだ……やってやるぜ！）
それだけで、気分が高揚していく魔依であった。

リングに上がったヘル・レイザーズの二人が、恵理と陽菜に対して向かい合う。
「今宵は素敵なパーティーにご招待いただき、お礼を言わせてもらうわ。」
恵理が慇懃無礼な口調で挨拶すると、陽菜もケラケラと笑い軽口をたたき始める。
「モンスター・ハデスの催しなんていうから、てっきりノーロープ有刺鉄線金網電流爆破デスマッチとかかと思いましたけど、普通のリングなんて拍子抜けですよ〜。ああ、こんな大きな会場貸切っちゃったから、設備費用が足りませんでしたかね？」
陽菜の挑発を余裕で受け止めた魅鬼が笑う。
「生言ってろよ、エンジェルぅ。金網なんかで、てめえらの泣きっ面が見えにくくなっちゃあ、大枚はたいて下さったお客様に申し訳ねえだろうが。」
魅鬼の言動に、カチンときた陽菜も言い返す。
「はぁ〜？こっちはチャンピオンなんですけど〜〜？勝つ前提とかって…」
収まりそうもないので、恵理が陽菜を手で制する。
「陽菜ちゃん、その辺にしておきなさい。ふふっ、前回と違う結果になるといいわね。今日はよろしく…」
恵理が優雅な笑みを浮かべて、魅鬼に手を差し出す…が、横からその手首を魔依が掴む。
「え…！？」
「これが、私らの握手だよぉ！！」
邪悪な笑みを浮かべた魔依が、恵理に木刀を振り降ろす。
「ぐぅっ…！」
反射的に空いていた片腕で防御する恵理だが、当然衝撃は小さくない。
「え…恵理さん！？」
気を取られた陽菜に、魅鬼のラリアットが迫っていた。
「ぁ…！！」
首への直撃は避けたが、軽量の陽菜が宙に飛ばされる。
そこで慌てたように、試合開始のゴングが鳴り響く。
『な…なんと波乱のスタート！！試合開始早々、4人の乱闘が展開されてしまうぞぉ〜〜〜っ！！！』
実況も焦り気味に仕事に取り掛かる。
「ひ…卑怯じゃない！」

なんとか体を起こした陽菜が咬みつくが、魅鬼は涼しい顔だ。
「あたしらはヒールだよ。強盗相手に「盗みは悪いことですよ〜」とでも言うつもりかい。メスガキが。」
（こいつら〜。恵理さんの礼儀正しさを逆手に取って。）
陽菜の心にふつふつと怒りが沸き上がる。
「許さないんだから！」
本当はゴングが鳴る直前に取るはずだったゴスロリ装飾を、陽菜が怒り混じりに外して投げ捨てた。
邪魔なものが無くなり一気に加速した陽菜が、魅鬼の懐に飛び込む。
「早…っ！？」
「はあぁ〜〜〜〜〜っっ！！！」
魅鬼が驚くのが早いか、陽菜お得意のエンジェルジャベリンが繰り出される。
魅鬼はそれを両手で捌いていくが、徐々に防御が間に合わなくなり、ついに陽菜の指先が魅鬼の顔を掠める。
「くぅっっ……！」
なんとか魅鬼が距離をとるが、バサッとそのポニーテールが解ける。
「……！！？」
陽菜の鋭いエンジェルジャベリンが、髪留めを砕いていたのである。
「次はあなたの顔面を砕いてあげるわっ。」
トンットンッと、リズムよくその場で飛び跳ねながら挑発する陽菜。しかし魅鬼はといえば、前髪の奥に妖しげな表情が浮かぶ。それは解けた髪の印象も相俟って、観客をも魅了する妖艶な笑みであった。
「へへっ…。がきんちょがぁ…、調子に乗ってんじゃ…ねぇえぇぇ〜〜〜〜〜！！！」

魅鬼が体に巻き付けていた鎖を外し、それを勢いよく振り回し始めたのだ。

魔依はといえば、不意打ちで怯んだ恵理に対して、さらに木刀で連続して追撃を加えていた。
しかし、さすがは恵理である。あっという間に見切り始め、カウンターのハイキックで木刀を砕いてしまう。
「！！！？」
信じがたいものを見るような目で、見事に折れた木刀を一瞥する魔依。
魔依が木刀を投げ捨てると同時に、恵理も煌びやかなドレス調の装飾を千切り捨てて身軽になる。
互いに突進し頭突きが衝突するが、魔依の方がダメージが大きかったようで、後方へとふらつく。
「そこよ！」
恵理が横薙ぎに空手チョップを放つが、ギリギリで魔依がバク転で避けた。
「っ！器用な真似を…っ」
恵理がさらに追撃をかけようとするが、魔依の口元にニヤリとした笑みが浮かぶ。
「…！！？？」
嫌な予感がして、スピードを緩める恵理の背中に衝撃が走った。
それは、縦横無尽に振り回されていた魅鬼の鎖によるものだった。
「え…恵理さん！」
心配そうに陽菜が叫ぶ。
「おぉ〜っと、当たっちまったか？悪いが、誰彼構わずぶっ飛ばすぜ〜。」
魅鬼自身狙ったわけではないようだが、広いとは言えないリングで振り回される鎖はなかなかの脅威である。
（くぅっ！？この硬さ…プラスチック製のレプリカじゃないわ。ガチでやるつもりなの…？それなら…）
「フッ、久しぶりに熱くなれそうね。」
口の端に笑みを浮かべながら、体勢を立て直す恵理。
その隙に、魔依が左右のブーツをぶつけ合わせる奇妙なアクションをとる。
その衝撃音にハッとした恵理が魔依に向き直るが、彼女は既に距離を詰めてきており、鋭い蹴りを放ってくる。

上半身を仰け反らせて躱す恵理…だが、コスチュームの胸元が裂けていることに気付いた。
「こ…これは…！！？」
よく見ると、魔依が履いているブーツの爪先から、カッターナイフの刃が顔を覗かせていた。
（そんな凶器まで仕込んでいるの！？）
驚く恵理が、先ほどのアクションが刃を出すスイッチであったことを悟る。
「うらうらうらぁ〜〜〜〜！！」
魔依の物騒な蹴りが、恵理のコスチュームを徐々に切り裂いていく…そして、それに気付いた観客の空気に変化が訪れる。
「ちょっ…恵理様のコスチューム破れてない！？」
「マジかよ。デビルの奴やるぜぇ〜〜。」
「レ…レディの柔肌が……ゴクリ。」
「くそぉ〜、デビルめ〜。やめろっ……いや、やめるな〜っ！」
ある意味で冷静な観客は、素早く構えたスマホカメラをリング上に向けるのであった。
凛太朗はといえば、他の観客たちとは違う意味で熱くなり始めていた。
「すごいや、魔依さん。あんな仕掛けまで…っ。しかも、肌へのダメージよりコスチュームへの攻撃に特化した蹴り技。なんてテクニックなんだ…っ！」
『デビル、まさかの隠し武器！これにはさすがのレディもタジタジだぁ〜！！悪魔の牙によって、その美しい肌がどんどん露になっていくぞぉ〜〜っ！！』
ここぞとばかりに盛り上げる実況に熱が入る。
しかし、さすがにここでレフェリーがストップをかける。
「デビル魔依！いい加減にしろっ。さっきから反則が過ぎるぞ！入場時に持っていた木刀と鎖までは黙認したが、その仕込みブーツは容認できん！というか、まず互いの選手は片方コーナーに下がれ！」
「…チッ。」
興を削がれた魔依が舌打ちする。
反省の色が見えない彼女にレフェリーが詰め寄る。
「とにかく凶器は禁止だ！他に何か隠し持っていないだろうな！？」
「……ふ〜〜ん。」
つまらなそうに聞いていた魔依の口元に笑みが戻る。

「じゃあ、さぁ。キケンなモノをぉ、隠してないかどうか…。調べてみるぅ〜〜？」
「！？」
小悪魔の表情を浮かべながら、身体をくねらせて近付いてくる魔依に驚くレフェリー。
「ぇ…ぁ…いや…それは…！」
観客席から見ても、いつもと違う雰囲気の魔依の仕草は明らかだ。凛太朗もなんだかドギマギしてしまう。
「ほらほら〜、コスチュームの中とかさぁ〜。」
魔依がコスチュームを捲りながら上目遣いで迫る。ただでさえ今回は露出が多いのだ。ニプレスもつけていないのであろう。捲れたコスチュームの下から乳輪が顔を覗かせる。
「ぁ…ゴクリ…」
レフェリーとはいえ、そこに目がいくのは悲しい男の性である。しかし…
「ジロジロ見てんじゃねぇよ！このスケベ親父がぁ！！」
次の瞬間、二人の距離がゼロになり魔依の拳がレフェリーの腹に埋まる。
「がっ！！？……っ」
ドサッと、レフェリーの身体がマットに沈む。その目は白目をむき、口からは泡を吹いている。
「やだぁ〜ん！興奮しすぎちゃったのかしらぁ〜。失神しちゃった、てへっ♡」
わざとらしい発言をする魔依に、恵理も陽菜も言葉を失う。
この予想外の展開に、凛太朗も驚きを隠せない。
（あの魔依さんがハニートラップとか！？どれだけ、この試合に懸けてくれているんだ…。…まあ、なんとなくレフェリーはいい気味だけど…）
『うわぁ〜〜〜〜っと！まさかまさかの展開ぃ！！ここにきてレフェリーが強制退場！！いったい何が起こった！？デビルの魔力かぁ〜〜！！』
その実況に、もはや反論も受け入れられないであろうと悟る恵理。
（なんて奴なの…。あの角度なら、リング外からは死角になっている。…とはいえ、一撃で大の男が気絶？）
魔依が場外に飛び降りると、リングアナからマイクを奪い取り、再びリングの中央に戻る。
『あ〜、テス、テス……。…さぁ！野暮なレフェリーは地上に帰った！！ここか

らの勝敗は、エリュシオンの民たる諸君らがジャッジしてくれぇ〜！！！』
観客に向けた魔依のマイクパフォーマンスに、歓声が一際大きくなる。
その反応に気を良くした魔依は、笑顔でマイクをリングアナに投げ返す。
「まぁ、ジャッジは難しくないさ。なんといっても、あたしらの圧勝になるからな。ケッケッケ♪」
そんな笑顔の魔依を、憎々し気に睨みつけているのは陽菜である。
（なんなの…なんなのよ、さっきから一体！？主催だからって、アイドルである私を差し置いて、あんたやりたい放題で目立ちすぎでしょっ）
陽菜の視線に気付いているのかいないのか、魔依は余裕綽々である。
「…ってことで、魅鬼。こっからは本気モードで行くぜ〜。」
「おうよ！じゃあ、もう良い子ちゃんはやめていいんだな？」
「モチのロンよ！」
先ほどからのヘル・レイザーズによる一方的な言動に、とうとう陽菜がキレる。
「さっきから聞いてりゃ言いたい放題！今までのあんたたちの、どこに「良い子」なんてあったのよ〜！」
走り出す陽菜を捉えようとする魅鬼だが、自らの長い髪が視界を邪魔して狙いが逸れる。その隙に魅鬼の腕を素早く掻い潜り、陽菜が魔依にタックルをかける。
しかし、その手は空を切る結果となる。跳躍で陽菜の手を潜り抜けた魔依が、コーナーポストに着地した。
「なっ！？」
陽菜の驚きと同時に、観客席が沸き立つ。
それもそのはず、コーナーポストに着地したのは足ではなく左手であった。
今、魔依はコーナーポストに片手で倒立していたのだ。
当然、凛太朗も目を奪われる
（ま…魔依さん。なんて体幹と跳躍力……か、華麗だ…）
「また注目を集めて〜〜。猿みたいに跳び回るな！」
ジェラシー混じりに陽菜が手を伸ばすが、魔依は左手で跳び上がり、陽菜の背後に着地する。
「！？しまっ……！！」
素早く振り返る陽菜に、魔依の蹴りが二連撃で襲って来る。
陽菜はなんとか両手を前に出すが、
（防御が間に合わない…！）

！！
「……あれ？」
文字通り切り裂くような蹴りがヒットした…気がした陽菜だが、特にダメージは無いように見受けられる。
（あのデビルがミスした？）
首を傾げる陽菜をニヤニヤ見ながら、魔依が自らの肩を親指でつつく。
「…肩……！？」
ハッと自分の肩に触れた陽菜が、コスチュームの肩口部分が左右共に切断されていると気付く。
（…うおぉおぉぉ〜〜〜〜〜〜〜！！！！！）
一拍遅れて歓声が上がる。
「良かったじゃん。注目されたぜ♪」
魔依がケラケラと笑いながらからかってくる。
「〜〜〜〜〜……っっ！！」
陽菜の顔が、怒りと羞恥に染まる。
タイトなコスチュームであるから、肩紐が無くなってもすぐにズレ落ちたりはしないし、立ったり歩いたりなら問題はないだろう。しかし、プロレスなどという激しいアクションをすれば…いつ外れてしまうか分からない。

そう思うと、コスチュームのことが逐一気になり、陽菜は試合に集中できなくなってしまう。
そんな陽菜の状況を、楽しそうに見ているのは魅鬼だ。
「わ〜〜〜はっはっは！！ガキが何を気にしてやがるんだ！おめえの子供おっぱいなんか誰も見たがってね〜よ！」
魅鬼の揶揄するセリフにも、怒る余裕のない陽菜はコスチューム

を手で押さえて、唇を噛みしめるしかない。
それを好機と見たのか、魅鬼の暴言はさらに続く。
「いっちょ前に恥ずかしがってやがんのかぁ〜？そんな胸、見る価値ね〜わ。ほら、魔依。お前も笑ってやれ！あ〜はっはっはっはぁ！！！」
「…ぇ、ああっ。あ…あ〜〜はっはっはっは…ハァ…」
（魅鬼は、ああは言うけどよ〜…）
トップコスチュームからはみ出た陽菜の胸ははち切れそうな迫力があり、中学生レベルで見れば十分に巨乳以上と言えた。勿論、爆乳レベルの魅鬼は言うに及ばず、恵理にも及ばないが…。少なくとも魔依より大きいのは明らかであり、そんな陽菜を笑っている自分がひどく虚しく思えてしまうのだった。
「ハァ……、チッ！……殺ぉ〜す！！」
「ち…ちょっと！なんでいきなりブチ切れたのよ！」
巨乳許すまじの勢いで襲い掛かってくる魔依だが、横から恵理の体当たりを受けてリングを転がる。
「さっきから、私のことを忘れてないかしら？」
「恵理さ〜ん！」
弱気になっている陽菜が恵理に泣きつく。
「しっかりしなさい、陽菜ちゃん。あなたはキューティ・ペアの勝利の天使よ！」
「…！恵理…さん。」
（そうだ、私はプロ。コスチュームのズレなんか気にしてる場合じゃない…っ）
自分を叱咤する陽菜。
「調子に乗るんじゃね〜よ！！」
魅鬼が鎖を飛ばしてくるが、恵理がそれを掴み取り、逆に引っ張りだす。
「！？…へへへ…、あたしと力比べとは…なめるなぁ〜〜〜！！！」
やはりパワーでは分がある魅鬼。恵理を引っ張り、その勢いのままにコーナーポストに投げ飛ばす。
「くっ！」
恵理が空中で体勢を変えると、コーナーポストに蹴りを入れて着地する。
「さっきはよくも〜〜！この爆乳レディがぁ〜〜〜！！」
そこに魔依が組み付いてくる。しかし、それを両手で組み合うように防ぐ恵理。
「「くくくぅ……っ！」」
二人の力比べが始まる。

普段なら恵理の方が力が上だが、体勢が十分でなかったことで今は膝をついている状態であり、押し合いはほぼ互角である。
「恵理さんは、私が助ける！」
立ち直った陽菜が助力に向かうが、魅鬼は見逃さない。
「させるかよ！」
「！！？」
陽菜の顔面に魅鬼の張り手がヒットする…いや、そのままアイアンクローとして陽菜の頭部を締め付ける。
「ぁああ…っ！ぐぅ〜〜っ！！」
苦しみながらも何とか脱出を図る陽菜だが、少しずつその足がマットから浮き始める。
「いくらエンジェル陽菜が軽量とはいえ、片手で持ち上げるなんて…」
その様子に凛太朗も驚愕する。
『サタン魅鬼選手！その膂力で陽菜選手を持ち上げて……あぁ〜〜〜っと！そのままマットに叩きつけたぁ！！！』
実況の言うとおり、陽菜は後頭部からマットに叩きつけられ、軽い脳震盪に陥る。
そこに鎖を拾った魅鬼が近付く。
「子供は寝る時間かい？でもな〜、まだまだおねんねには早いんだよぉ〜〜！！」
今度は鎖を陽菜の首に巻き付けて、再び宙吊りにする。
『陽菜選手、これは苦しい！魅鬼選手のチェーン・ネック・ハンギング・ツリーだぁ〜〜〜〜！！！』
「…あっ…ぁぅ……ぐはぁ…ぁ……っっ…」
陽菜の表情が窒息による苦悶に歪んでいく。
『本格的な首絞めは反則です！…が、レフェリーがいないリング上は、もはや無法地帯か！陽菜選手のファンからも心配するため息が聞こえてきます…！』
そんな実況の声が、陽菜の耳には遠く聞こえる。
（もぅ…ダメ…。そうだ…タップ…ギブアップすれば……、いや、ダメだ！それじゃ…私のせいで恵理さんが負けちゃう…！）
「どうだぁ〜。ギブするかい？…まあ、レフェリーがいねえから、それをあたしらが認めるかは分からないがな…ハハッ」
サディスティックな笑みを浮かべる魅鬼。

「ひ…陽菜ちゃん！！」
さすがにパートナーのこの状況は、恵理も気にせざるを得ない。だが、それが拮抗していた力比べのターニングポイントになった。
「うおりゃぁ〜〜！」
「！？」
魔依に押し返された恵理が、マットに倒されてしまう。そこで顔面へのヘッドバットで追い打ちをかけられ、恵理の顔に赤みがさす。魔依はさらに、マウントポジションから息もつかさぬ連続パンチを繰り出していく。

続きは製品版でお楽しみください

本書は成人を対象とした性的描写を含む小説ですので
１８歳未満の方は拝読することが出来ません。

■権利帰属
本作品に関する著作権、著作隣接権、その他の知的財産権は当サークル（ノヴェール）に帰属するものとします。
また、本作品内における各種素材の著作権のうち、放棄されていない物に関しては、それぞれ上記の作者に帰属するものとします。

■免責事項
当サークルは、本作品を使用することによりユーザーに生じた損害について、一切賠償の責を負わないものとします。

■禁止事項
・本作品を無断で複製・転載・配布することを禁じます。
また、作品内で使用している素材を抜き出し、流用することを禁じます。
・本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

※本作品はフィクションであり、実在の人物・団体・事件等には一切関係ありません。